

## ポスターセッション

## 博学連携による子どもの発達段階に 応じて学ぶ身近な自然「蜃気楼」

千葉県立中央博物館 生態学・環境研究科 主任上席研究員 大木 淳一

富山県で有名な珍しい蜃気楼が、千葉県九十九里浜で2015年8月に発表者により104年ぶりに再観測された。その後の研究で、九十九里浜が全国で有数の蜃気楼観測地であることが分かってきた。しかし、地域の魅力であるはずの蜃気楼を学ぶ機会が学校教育現場では無いのが現状である。そこで、蜃気楼観測地である九十九里町のこども園、小学校、中学校と連携し、蜃気楼を学習するプログラム開発を2021年から開始したのでその実践報告を行う。

## 女性科学者の本からジェンダーギャップを考える

～ミニ企画展「科学の本棚Ⅱ 科学と女性」で発信したこと～

多摩六都科学館 パブリックリレーションズグループ 主任研究員 原 朋子

科学の視点で世界を見る行為に性別は関係ないが、科学者に対する世界からの評価には男女の性差が大きく表れる。科学史を辿れば功績がなかなか認められなかった女性科学者の例が簡単に見つかるが、科学を学ぶ中でそのことはあまり意識されない。2021年秋に多摩六都科学館で開催したミニ企画展を例に、女性科学者の伝記絵本や著書等の図書展示を通じて男女のジェンダーギャップに気づく機会を作った取り組みについて紹介する。

## 静岡科学館における大人限定夜間開館の取り組み

静岡科学館 る・く・る 事業担当長/主査 代島 慶一

静岡科学館の主な来館者層は小学校低学年親子であり、大人のみでの来館はトークイベントや企画展等に限定されている。また、子ども連れのグループでも保護者が展示物等を体験することは限られている。一方で年齢に囚われず、多様な年齢層の利用やサードプレイスとしての利用が求められており、2021年度より、18歳以上限定の夜間開館を行い、大人だけで体験できる展示、大人だからこそ扱える内容の教室を試用している。静岡における大人来館層の開拓の現状を報告する。

## 既存の事業で実施できる放課後デイサービスや 児童発達支援事業所との連携

きしわだ自然資料館 学芸員（主査） 風間美穂

きしわだ自然資料館では特別展の告知物送付の際、招待券を同封するが、送付先に近隣の放課後デイサービス等を追加したところ、存在を知った複数の事業所職員が招待券を利用して来館し、事業所行事としての見学に繋がった。指導員からは、当館の送付物を契機に博物館自体に興味をもち、他館も利用したという報告があった。現在は複数の事業所が、施設の年中行事のなかに当館の見学と科学プログラム体験を組み込んでいる。

## 誰もが楽しみながら学べる博物館を目指して ～くじらの博物館の取り組みを事例として～

太地町立くじらの博物館 学芸部 中江環

現在の博物館には、全ての人々が平等に楽しみ学べるようにするための配慮が求められているが、くじらの博物館では、特に視覚に障がいがある人々に対する配慮をしておかなかった。こうした現状から近年では、視覚障がい者の要望を反映した「さわってまなぶ」展示コンテンツや点字や触察図を取り入れた展示解説補助ツールなどの開発を積極的に行っている。本発表では、そうした事例を、利用者を対象に実施したアンケート調査の結果を踏まえて紹介する予定である。

## 未就学児のふりかえりによる 学びを補助する絵本作り

滋賀県立琵琶湖博物館 研究部 中村久美子

当館では、未就学児童を対象とした自然活動を毎月実施しており、繰り返し参加するリピーターも多い。子どもたちは、家に帰って博物館の森で体験したことを振り返り思い出すことで学びを繰り返している。本研究では、この学びのサイクルを補助するアイテムとして絵本を作成している。

今回は、この絵本の狙いや未就学児を対象とした博物館活動の可能性について議論する。